

## PROJECT 「視点を変えて学びを拓く」教科×社会課題×探究の実践セミナー開催



東京学芸大学高校探究プロジェクト  
オンラインセミナー  
「教科の視点で社会課題にアプローチ」  
＜第2弾＞

無駄なモノはひとつもない。  
視点を変えてみればそれは才能の原石かもしれない。  
物事の捉え方、人の個性も、あらゆる角度から光を当て、  
見つめることですべてに意味と価値がある。  
社会課題に向き合うとき、教科の視点をどのように生かせるのか、改めて考えてみませんか。

開催日時：2026年1月23日（金）  
19:00～20:30  
形態：Zoomによるオンライン

話題提供者：The Ethical Spirits  
代表取締役CEO 小野 力氏  
対象：高校生、高等学校等教職員、教育委員会指導主事、  
教員志望の学生等

本プロジェクトでは、得手・不得手や価値観の異なる人々が互いを尊重し、対話を重ねながら共に考え合える社会の実現を目指しています。探究の出発点を「与えられた課題の解決」ではなく、「自分たちはどのような社会を実現したいのか」という問いをもとに、その実現に向けて教科の見方・考え方を活用する学びのあり方を重視しています。社会を「他人事」ではなく「自分事」として主体的に関わる姿勢を育むことを、ビジョンとして掲げています。

こうした趣旨のもと、本セミナーでは、実社会の中で葛藤や「ワクワク」を抱えながらビジネスを通して価値創造に取り組んできた小野氏の話題提供をうけて、高校生の探究をより現実社会と結びつけた「自分事」として深めるための視点やヒントを探る場としました。

### 視点を変えることで生まれる価値づくり

小野氏より、自社の取組を通じて、社会課題へのアプローチ方法が語られました。

**「もったいない」を価値に**（右上図参照）：従来は廃棄されてきた酒粕などの未活用素材を原酒（アルコール源）とし、多様な素材（ボタニカル）で香り付けを行うことで、高品質な期限のないクラフトジンを製造。

**既存の視点を捨てる**：ジンは「ジュニパーベリーで香り付けさえすれば良い」という広い定義に着目し、カカオの殻、コーヒー粕、さらには木材（スギ・サクラ）を直接発酵・蒸留させる世界初の技術など、既存の枠組みにとらわれない発想で、一見「無駄」と思えるものから新たな価値を発掘。

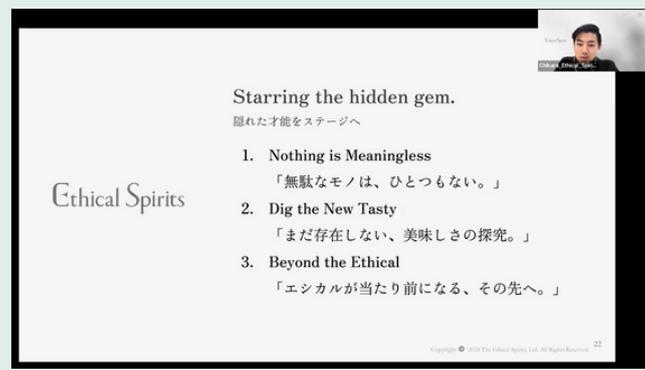
**根底にあるフィロソフィー**（右下図参照）：「Nothing is Meaningless（無駄なモノは、ひとつもない）」を掲げ、「エシカルであること」を目的にするのではなく、「まだ存在しない美味しさ」という嗜好品としての価値を追求することで持続可能なビジネスや社会変革につながる。

教育現場に向けては、「一見無駄に見える発想や議論、内なるワクワクを大切にすることが、社会課題への主体的な関わりを生む」「失敗しないと見えてこないものがある」との示唆をいただき、参加者は、小野氏の「絶賛失敗中」という言葉から、試行錯誤の積み重ねこそが価値創造や成長の基盤となることを学びました。

その後の西村リーダーと小野氏との対談では、「探究」と実社会での「価値創造」を繋ぐための議論が交わされました。

2026年1月23日に、高校探究プロジェクトアドバイザーのエシカル・スピリッツ株式会社の小野力氏をお迎えし、「教科の視点で社会課題にアプローチ」オンラインセミナー＜第2弾＞を開催しました。

本セミナーの趣旨説明として、本プロジェクトの西村リーダーより、高校における現在の探究が教科での学びと切り離され、「アイデア勝負」に終始しがちな点を指摘し、「教科で学んだ知識や考え方が、社会課題に取り組む探究に十分活かされていない」と問題提起を行いました。これからは、専門性を深めるだけの「I型」から、広範な知見で他者とつながる「T型」や「H型」の探究へと転換させる必要性が示され、社会課題の解決を目指す「Science for Society」の視点が重要であると強調されました。



### 対談報告：探究と実社会をつなぐ学びのヒント

議論では、探究の出発点として、社会課題やSDGsといった外発的な目的よりも、「面白い」「やってみたい」という「内なるワクワク感」を大切にすることの重要性が強調されました。自分の関心や情熱から始めることが、探究を継続し、社会とつながる原動力になると確認されました。

小野氏は、多様な専門性をもつメンバー同士の対話や衝突、失敗、そして「無駄に見える発想」が、新たな価値やイノベーションを生むことを実体験から語りました。

対談を通じて、探究は、「どう生きたいか」「何に心が動くか」という内発的な問いから始めるべきであり、その過程で教科の知識や視点を活用する意義が共有されました。

2026年1月30日に、国際協力機構（JICA）の河島三奈氏を招聘し、「ミニ探究」デザインワークショップを開催しました。

### 一 探究の閉塞感を超え、「探究2.0」へー

冒頭、西村リーダーより、現在、高度な探究に取り組む生徒がいる一方、「自分にはできない」「どうせ」と他人任せをはじめから諦めがち姿勢が、探究に対しても現れている生徒が少なからず見られる現状が共有されました。本プロジェクトは、従来の探究に留まらず、対話を起点に他者に関われた探究、すなわち「探究2.0」への転換を目指す上で、本格的な探究活動「旅中」に入る前の段階として、教科の視点をういた対話により問いを見出す「旅前（きっかけ作り）」の場として「ミニ探究」を提案しています。

### 一 国際協力の現場から問う「持続可能性」一

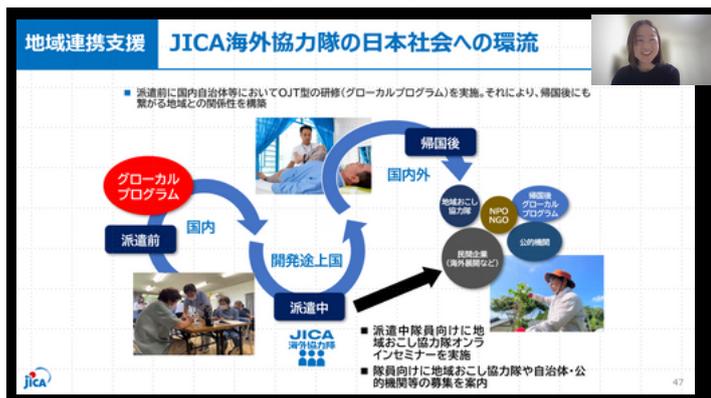
河島氏からは、青年海外協力隊や教員経験を経てJICAに至った自身のキャリアをもとに、「サステナブルは本当にサステナブルなのか」という問いを軸に、国際協力の現場で抱えてきた気づきが共有されました。

従来の支援する/される「支援」型から、異なる価値観を持つ人々が対話を通してニーズにたどりつく「共創」型へと、国際協力のあり方が変化していることが語られました。また、派遣前・中に築いたネットワークや地域とのつながりを、帰国後も日本の地域課題解決に活かす「環流」の取組が紹介されました。（下図参照）

### 一 未来を夢見る力と、対話の可能性一

河島氏、西村リーダーに加え、山本勝治先生（開智国際大学）、小松万姫先生（国際基督教大学）を交えた座談会では、「日本社会そのものは持続可能なのか」という問いが参加者に投げかけられ、幅広い議論が展開されました。

小松先生からは、現代社会において「明るい未来を夢見る力」が弱まっているのではないかと指摘がありました。この現状を打破するには、限られた資源の中で他者を理解し、共存していくための「対話」こそが、新しい未来を夢見る鍵になると語られました。異文化体験や探究は、自分の「当たり前」を揺さぶり、価値観を転換させる経験であり、他者との対話こそが、新しい未来像を描く力になるのではないかと議論されました。



## 「ワクワク」を引き出し、探究を深めるためのコツ

2つのセミナーに共通して浮かびあがったキーワードは「ワクワク」でした。そこで、生徒の「ワクワク」を引き出すコツについてまとめてみました。

1. 「社会のため」の前に「主観的なメリット」を優先する  
社会課題の解決を最初から大きな目的（「日本中の酒粕を救う」など）に据えるのではなく、自分自身が「面白い」「美味しい」「やってみたい」と感じる主観的な動機を大切にすることが重要。小野氏自身、「酒粕から生まれたクラフトジンが美味しい」というシンプルな感動がスタートだったとのこと。自分たちのメリットや楽しさを着実に求めることが、結果として活動の持続可能性につながるのではないかと。

### 2. 「一見無駄だと思える発想」を面白がる

「自動車業界とお酒で何ができるか」といった、一見すると無駄や不可能に思える空想や議論を排除しないことが大切。新しい価値を生むためのプロセスとして、既存の枠組みでは「無駄」とされるような時間や問いを楽しむ姿勢が、イノベーションやワクワクの源泉となるのではないかと。

### 3. 「自分にできる小さなこと」の積み重ねを評価する

情報の多い現代社会では、社会への大きなインパクトを残そうとするとかえって自分の無力感に陥ってしまう（スパイラルに入る）ことがある。これを防ぐには、「自分が今できること」や「パッションを持てる小さなこと」を着実に積み上げることにフォーカスさせるのがコツ。こうした小さな成功体験の積み重ねが、最終的に社会を変えるきっかけになるのではないかと。

4. 既存の視点を外し、教科の視点から「問い」を立て直す  
一つのトピック（お茶や電池など）に対し、既存の専門家や業界の視点を一度外し、新たな角度や違った教科の視点で「問い」を立てることで、価値や意義を再発見できるのではないかと。

### 5. 些細なきっかけを肯定する

探究の出発点は些細な興味関心でいいのではないかと。その「きっかけ」を深掘りし、仮説と検証、試行錯誤（トライ&エラー）を繰り返すプロセスそのものを楽しむ雰囲気大切なのではないかと。

## ブレイクアウトセッションの様子と参加者の声

教科別のグループに分かれ、「『探究2.0』における教科の役割」をテーマに対話を行いました。

高校生からは、「探究とは『自分の関心と社会をつなげるプロセス』であるということに気づいた」「VUCA時代に必要なのは、対話を通じて自ら考え、判断する力である」という意見が多く聞かれました。

教員・教育関係者からは、「生徒のワクワクを引き出すためには、まず教員自身がワクワクして向き合う必要がある」「探究の転移、夢見る力、時間軸の視点などといったキーワードが得られ、そのエッセンスなら授業に取り入れられそうだ」といった前向きな声が寄せられました。

本ワークショップは、「ミニ探究」という手法の紹介にとどまらず、参加者一人ひとりが「自分たちの生きる社会をどうしたいか」を問い直す場となりました。教科の視点を働かせて社会のトピックを見つめ直し、多様な他者と対話することこそが、未来を創る探究の出発点であることを再確認する会となりました。

